

あるところに、昔は金持ちでしたが今はびんぼうになつてゐる家がありました。

ある年の節分の晩、この家に、みすばらしいお坊さんがやつて来て、ひと晩泊めてほしいといいました。主人は、

「泊めてくれといわれても、何も食べる物がありません」とことわりました。お坊さんは、「庭のすみにわらをしいだけでいいから、泊めてください」とたのみました。そこで、主人は、「それでいいなら、どうぞ泊まつてください」といつて、お坊さんを泊めてやりました。

夜中ごろ、お坊さんが寝ていると、ひそひそ、ひそひそ、話しがしました。どうも庭にだれかいるようです。耳をすましていると、

「この家は、何でも粗末にするからびんぼうになるばかりだ。みんなで出でていこうじゃないか」といつていました。お坊さんがそつとのぞくと、米の神さま、野菜の神さま、着物の神さま、田の神さま、畑の神さまたちが、集まつて話しているのでした。

「ここの人たちは、田んぼはほつたらかしだし、畠も草だらけで、なまけてばかりだ」

「取つたもの、食べちらかして、残つた物はすてたりする」

「こんな家には、もういたくない」

すると、米の神さまがいいました。

「みながおこるのも無理はない。だが、この家には、いい女中がひとりいる。一つぶのご飯も拾つてだいじに食べる娘だ。それがわしはうれしいのだ。あの女中にめんじて、もう一年だけ、みな、ここにとどまつて、この家を守つてやってくれないか」

ほかの神さまたちは、

「あなたがそういうのなら、そうしよう」といいました。

あくる朝、お坊さんは、主人に、

「泊めていただいて、ありがとうございました」とお礼をいつて、ゆうべの話をしました。

「夜中に庭で、ひそひそ、ひそひそ話しがするので、のぞくと、おおぜいの神さまが集まつて、この家は何でも粗末にするから出ていこうと話していました。けれども、米の神さまが、この家には、一つぶのご飯も拾つてだいじに食べる女中がいるから、もう一年だけ待つてくれといつていましたよ」

主人は、

「ああ、なるほど、そうかもしません。これからはなんでもだいじにしましよう」といつて、

お坊さんにお札をいいました。お坊さんは、

「そうするといい」といつて出ていきました。そのお坊さんも、神さまだったのかかもしれません。

おしまい

原話..『丹後伊根の民話』立石憲利編著

再話..村上郁